

令和3年度
障害学生支援理解・啓発セミナー

明治学院大学における 障がい学生支援について

—聴覚障がい学生への支援を中心に—

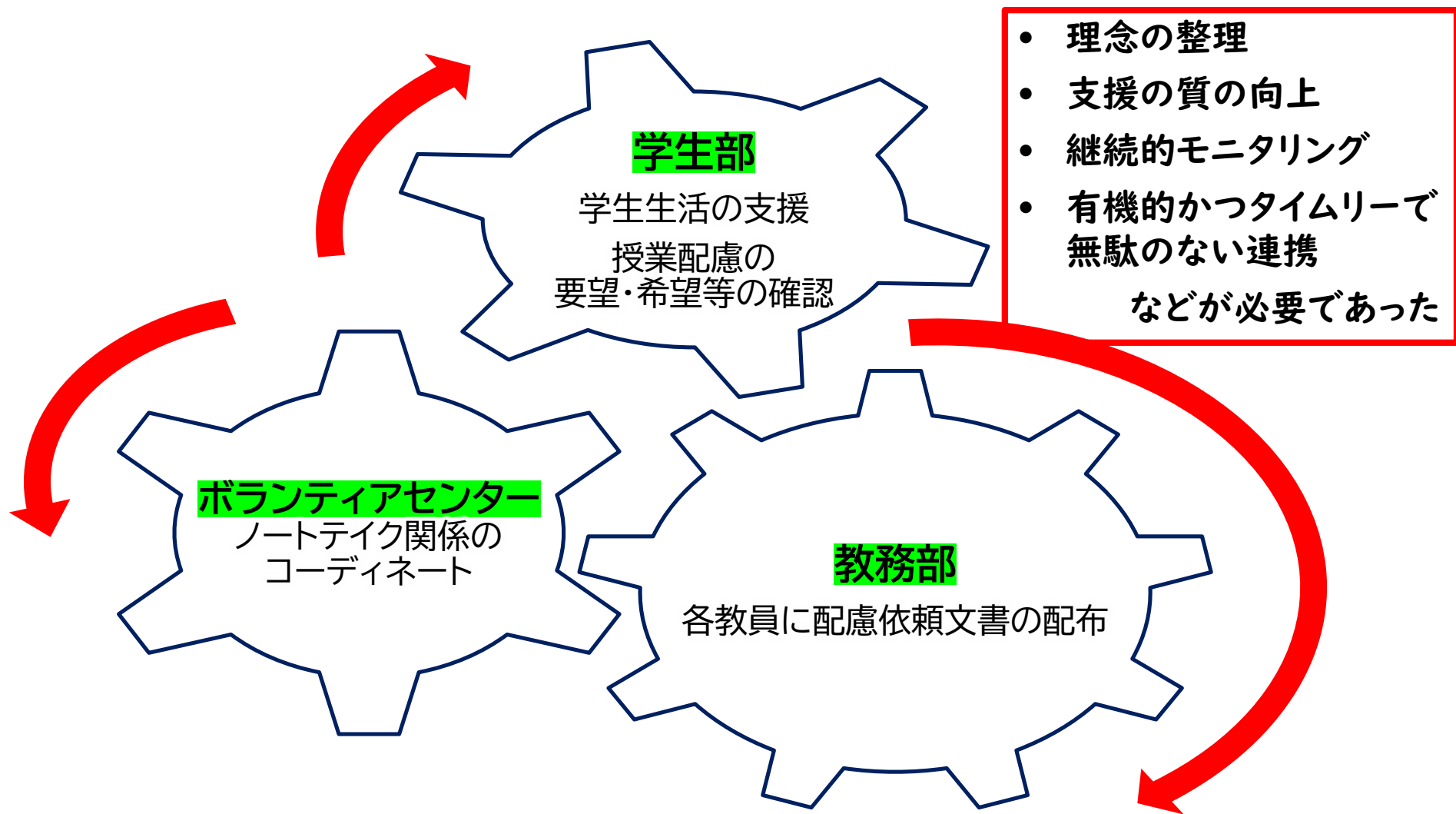
明治学院大学 学生サポートセンター
岡田 孝和

明治学院大学の概要

- 創設者へボン以来のキリスト教による人格教育という建学の精神を継承 教育理念：“Do for Others”（他者への貢献）
- 2キャンパス制 東京白金 主に3、4年生と大学院生
 横浜戸塚 主に1、2年生と国際学部生
- 人文社会学系総合大学：6学部 | 6学科、7研究科 | 2専攻
- 学生数：約12,000人
- 年間50～60名ほどの多様な学生が修学支援を利用
 - 視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、発達障害、精神障害・疾患、病弱虚弱、難病、重複障害 など

支援を必要とする学生への支援体制の整備

障害のある学生への支援は長いものの…、



支援を必要とする学生への支援体制の整備

- 就学支援に関する総合支援窓口として、学生サポートセンターを2011年4月に開設
- 各校舎に、コーディネーター2名（常勤）、受付事務1名を配置
 - コーディネーターは関連分野の有資格者。
 - 公認心理師、社会福祉士、精神保健福祉士、臨床発達心理士、特別支援教育士など
 - 当初は各校舎1名体制から順次増員。任期ナシ。
- 2018年度よりテクニカル・スタッフ配置（後述）
 - ノートテイク、文字起こし、データ化、学生サポートスタッフの養成などの「直接的サポート」を担う
 - 順次増員

支援の理念：「障がいのある学生への修学支援の基本方針」

1. 教育を受ける機会の平等を実現し、卒業後は自立的な社会生活を送れるよう、障がいのある学生や支援を必要とする学生への修学支援を行います。

合理的配慮 (Reasonable Accommodation) の考え方に基づき、教育内容の本質や評価基準を変えず、すべての学生に同一で質の高い教育を保障します。

2. すべての学生の学びと成長のため、学生同士でサポートし合える環境づくりを行い、社会に貢献しうる共生社会の担い手を育成します。
3. 障がい学生支援に関する啓発活動を通して、大学全体の教育力・学生支援力の向上を目指します。

学生サポートセンター設置後すぐに策定

- ミッションの明確化、業務の範疇の可視化 (部署間の分掌)、自らの業務の内容・方向性の設定などに非常に効果的だった

支援の理念：支援をする上で掲げている価値観

- 障害者差別解消法施行や「検討会」の頃に追加で掲げる
- 「基本方針」はあったが、“どのように支援を進めるか”は意外と振れ幅があった。(大学の構成員間でも微妙に異なる)
- 法律ができるからといって、すべきことを大きく変えないといけないという認識はなかったが、本学の支援のありようが法の趣旨とも結果的に合致してこともあり、この時期に改めて明確化。

学生の意思を尊重します
個別性を尊重します
総合的に支援します

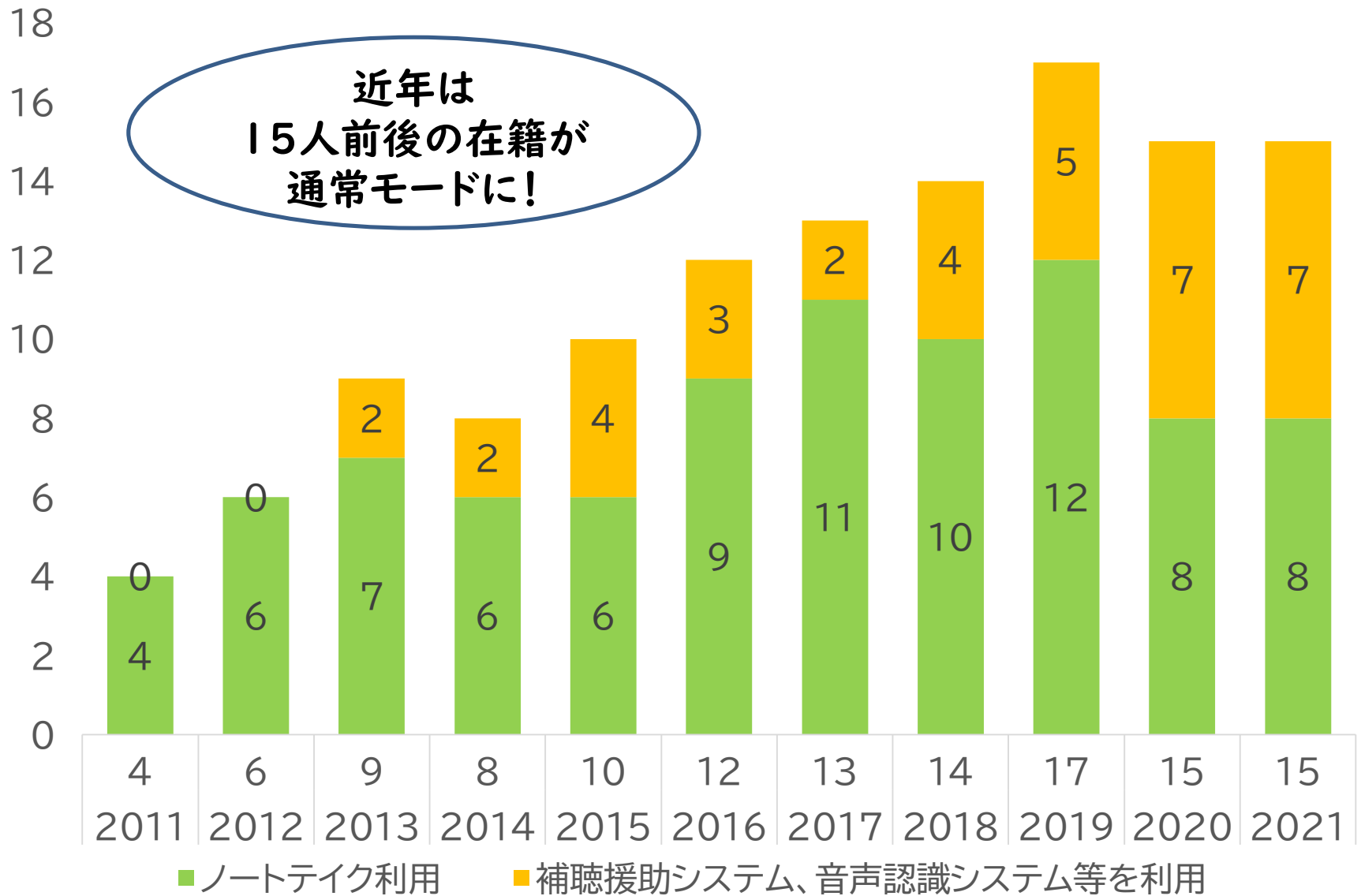


聴覚障がい学生への支援について

- 手書きノートテイク
- パソコンノートテイク
- 手話通訳
- 音声認識システム UDトーク
- 補聴援助システム Roger
- 映像教材の文字起こし

各授業の形態や各回の形式・内容に合わせて**選択**したり、
場合によっては**併用**したり、
コロナ禍では、これらの支援を**遠隔**で行ったりしています。

聴覚障がい学生数の推移



聴覚障がい学生数増加の影響

• コーディネーターの負担の増大

- ピーク時はコーディネーターと受付スタッフで全体の2割、500時間程度を担う。1週あたり5~10コマ入っていた? → 業務時間の圧迫
- 当時の受付スタッフがノートテイクに入れたのは偶然。今後もそれを期待してはマズイ。
- 地域のノートテイクにも相当数依頼。非常に助かった反面、その都度の手配→調整→連絡→フィードバックの負担はかなりのもの。
- 他の業務に影響が出てしまう時も。(ex. 面談のリスケ。他部署や教員からの問い合わせに即応できない などなど)

	2017春	2017秋	2018春	2018秋	2019春	2019秋	2020春	2020秋	2021春
ノートテイク合計	1,192.	1,504.	3,002.	2,296.	3,010.	2,803.	491.0	894.0	1,667.
事務スタッフ		136.0	248.5	135.0	51.0	34.5	26.5	38.0	0.0
コーディネーター		121.5	250.5	94.5	214.5	87.0	62.5	63.0	117.5
テクニカルスタッフ			210.0	208.5	459.0	315.0	349.5	523.5	712.0
地域(学外者)	460.5	364.5	922.5	774.0	1,071.	862.0	0.0	0.0	187.5
学生	732.0	882.5	1,370.	1,084.	1,214.	1,505.	52.5	269.5	650.5
手話通訳合計	87.0	107.0	145.5	160.0	138.0	149.5	0.0	16.0	0.0

聴覚障がい学生数増加の影響

- ノートテイカーを増やすための養成が負担に拍車を
 - 状況をコントロールしているというよりも常に後追い。体力的な負担だけではなく、精神的な負担感も相当に大きかった。
 - 日々のやりくりを追われてしまい、先を見通した取り組みがやりきれなかった。
 - つまるところ「体力勝負」。

初心者養成講座

- 参加できない学生もいる。
- 参加できない学生を拾うために別日程を設定

個別練習

- みっちりやってからデビューさせたい。
- 中途半端な状態で現場に入る時も（特に語学の手書き）
- 誰がどこまで進んだっけ？
- 誰が担当できる？
- 教え方は揃ってる？
- 練習ネタはどうする？
- 上達度の評価は？

活動後のフォロー

- 正直ここまで手が回らない…
- 穴もたくさん見られるし、自己流でしてしまっている人もいる
- 技術以外のことについてもノートテイカー間や聴覚障がい学生も含めた全体でズレが生じている

対応にあたっての考え方：基本に立ち返る

- 明治学院大学「修学支援の基本方針」

教育を受ける機会の平等を実現し、卒業後は自立的な社会生活を送れるよう、…

- 聞こえる人と同等の情報は必須！
- 大学在学中に「完全な情報を得て」「十分に学べて」「本当の意味で“参加”できる経験がある」からこそ、「自己効力感」にもつながる。また、そうした経験から「自分に必要な支援がわかり」、4年間支援とともに学ぶ経験を通して、「他者に適切な形で支援を求める・説明する・教えるスキル」を身につけ、それを持って卒業するからこそ、自立した社会生活を送っていける。

対応にあたっての考え方：努力義務の解釈

- 「義務」を果たすのは大前提。「努力義務」はそれを実現するためにあらゆる努力をすること、徹底的に方策を探ることであって、「できない・しない」の免罪符ではない。
- 聴覚障がい学生への支援に関しては、量・質ともに「聞こえる学生と同等水準の」情報を伝達することが最低限のライン。これを下回っているのであれば、「義務を果たしていない」と同義。
 - × ノートテイクが確保できる範囲で支援をする
 - … 言い換えれば、初めから支援を受けられるコマ数を制限する
 - × 音声認識システムや補聴援助システムを導入して機械任せ
 - … 言い換えれば、支援のクオリティをモニタリングしない
 - × 語学等の支援はできなくてもしょうがない
 - … 最初から諦める。言い換えれば、聴覚障がい学生にのみアクセスを制限＝差別！
 - × 学生同士の支え合いで…
 - … 言い換えれば、「お互いに助け合う」「共生社会」のお題目のもとに、結果的に一方のアクセスを制限してしまうことも。「支え合う」こと自体は大切だけれども

対応にあたっての考え方：努力義務の解釈

- もちろん支援の**物理的・質的に**努力しても難しいことはある。また、そうではないとしても状況次第でできない時もある。
- 「あらゆる努力をする、徹底的に方策を探る」ことは必要だとしても無限に行うのは非現実的。ただ同時に、大学の方が「ウチにできる努力はここまでです」と線引きをする。ましてやそれを学生に強いるものではない。
 - ➡ 代替案を提示したり、不断の建設的対話を通して解決策や納得できるラインを協働で検討
 - ➡ これは4年間の間で変わることは当然ある
(入学前の相談での話がその後も有効とは限らない)

対応にあたっての考え方：努力義務の解釈

- ただし、義務とはいえ「至れり尽くせり」「すべて整っている」も違う。支援を利用するために必要な手続きや関わらなければならないこと(=学生の責任)はある。
 - ×「私には言わなくても完璧に支援をしてもらえる権利があります!」
 - ×「聞こえる学生だって〇〇なんだから、障がい学生も…」
 - ×「ほう・れん・そう」なしで、教室に入ったら支援者がいる。何も言わなくても質の高い支援が受けられる。終わったら「サヨナラ」。
- 自分が受ける支援は自分が関わって一緒に作り上げていくもの。大学は材料や道具は用意するが、それを「自分に合うもの」「自分好みのもの」にアレンジし作り上げていくのは学生自身。

対話と協働!!

対応策：スタッフ体制の増強

- 2018年度よりテクニカル・スタッフ配置
- ノートテイク、文字起こし、データ化などの「直接的サポート」や、学生サポートスタッフの養成において、個別的な練習を担う

- 2018年度1名
 - 2019年度3名（2名換算）
 - 2020年度5名（4名換算）
 - 2021年度6名（4名換算）
- 1日6.5時間×週4×10カ月（8月と2月以外）

	2017	2017	2018	2018	2019	2019	2020	2020	2021
ノートテイク合計	1,192.0	1,504.0	3,002.0	2,296.0	3,010.0	2,803.0	491.0	894.0	1,667.0
事務スタッフ		136.0	248.5	135.0	51.0	34.5	26.5	38.0	0.0
コーディネーター		121.5	250.5	94.5	214.5	87.0	62.5	63.0	117.5
テクニカルスタッフ			210.0	208.5	459.0	315.0	349.5	523.5	712.0
地域(学外者)	460.5	364.5	922.5	774.0	1,071.0	862.0	0.0	0.0	187.5
学生	732.0	882.5	1,370.0	1,084.0	1,214.0	1,505.0	52.5	269.5	650.5
手話通訳合計	87.0	107.0	145.5	160.0	138.0	149.5	0.0	16.0	0.0

コーディネーター & 受付スタッフが現場に入る負担の軽減

学外ノートテイカーを調整する負担の軽減

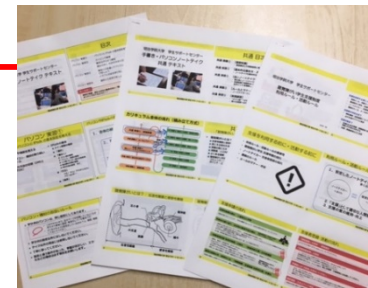
対応策：ノートテイクー養成の効率化

- 学生がノートテイクスキルを体系的に習得できる仕組み作り
- 大学が効率的に教えていくことができる養成プロセスの確立。体力勝負ではなく、コントロールしながら進めていける仕組み作り
- ノートテイクー集団として教えあったり、ノウハウを共有できる仕組み作り。壁にぶつかった時に「立ち返る場所」の可視化（ベースとなるスキル体系とリソースの構築と明確化）
- できる限り多くの学生に教えることのできる仕組み作り（「日程が合わなくて参加できない」を効率的に減らす）

対応策：ノートテイクー養成の効率化

- オリジナルテキストの作成
- 養成カリキュラムの統一
- 各種動画コンテンツの作成
- Googleフォームとスプレッドシートを使った情報の共有

- テキストの原型は以前からあった。
 - 講座のたびに少しずつ修正し印刷、配布。
常にアップデートする反面、これ自体が負担にも。
 - パソコンノートテイクは手書き以上に練習すること、しかるべき人が教えることが結局必要なこともあり、テキスト化していなかった。
(←スキルが体系化がされていないこと、非効率的な運用の一因)
- 2020年度に「今しかない!」といったんの完成を目指す。
 - 問題意識はあり、数年前から少しずつ取り組んではいたが…。



ノートテイクナー養成テキスト



- これまでのテキスト原型を整理、再構成、新規作成し、10のカリキュラム、スライド230枚の内容に。
- 講座に申し込んだ学生に無料で配布

講座・個別練習・デビュー後のスキルアップなどすべてはこのテキストに準拠

- 教える際のネタや説明の仕方は各スタッフでばらつきがあったとしても、理屈・理論・内容は統一。

カリキュラムの内容

手書きを基本にして、
要約力・整文力/
対応力・工夫力を
身につけていきます。

10

支援の利用ルール・活動ルール

9

パソコン実践練習/手書き・PC以外の
支援方法/支援に関するマナー

8

連係入力練習:話しことば

7

連係入力練習:書きことば

6

効率的で読みやすい入力
単独入力練習/トラブル対応

5

パソコン・IPtalkの基本操作と
タイピング練習

4

手書き実践:ペアでのノートテイク
様々な場面への対応・工夫

3

良いノートテイクのポイント

2

ノートテイクの基本と
手書きノートテイクの書き方

1

聴覚障がい・情報保障の
基礎知識

対応力・工夫力

様々な授業場面に対応するためのテクニック、工夫、
ペアのノートテイクや聴覚障がい学生との協力、
支援に入る前の準備の仕方などについて学びます。

要約力・整文力

ノートテイクは、元の話のを要約・整文して文字にして
いきます。その際に、どのような所に気をつけるべき
か、上手なノートテイクのポイントは何かを理解しま
す。このポイントを抑えられていないと、一生懸命
やっても「伝わるノートテイク」にはなりません。

動画とコンテンツ配信システム

視聴する人の属性に合わせて特に提示したいコンテンツを選択・配信
(教職員向けもアリ=FD/SDに活用)

設定 ログアウト

学生 サポートセンター

検索

全14件

おすすめ順

本棚

リスト

（教職員向けもアリ=FD/SDに活用）

- 職員 (7)
- 聴覚障がい学生 (22)
- ノートテイク (18)
- 未登録学生 (14)
- 学外支援者 (14)
- テクニカルスタッフ (18)
- 養成カリキュラム (14) *

The screenshot displays a grid of curriculum items, each with a video thumbnail and a title. The items are labeled curriculum_1 through curriculum_8. The thumbnails show various educational content, including handwritten notes, diagrams, and text-based presentations. The interface also includes a search bar at the top, a sidebar menu on the left, and navigation buttons at the top right.

Curriculum 1 ~ 10の内容を動画化

×オンライン任せ

- 対面またはオンラインの講座・練習の補完として利用
- 安定性の確保 … 講座や個別練習はライブ。その場で内容が変わることも。良い側面がある一方で、バラつきが生じるという面もある
- 復習や事前課題としての提示が容易 … 講座時間の短縮も
- 情報の一元化と共有

講座関連だけではなく様々なコンテンツをこのシステム上にアップ&シェア

動画とコンテンツ配信システム

curriculum_8_UD



次は、「素起こしはしない！」ということについて説明していきます。

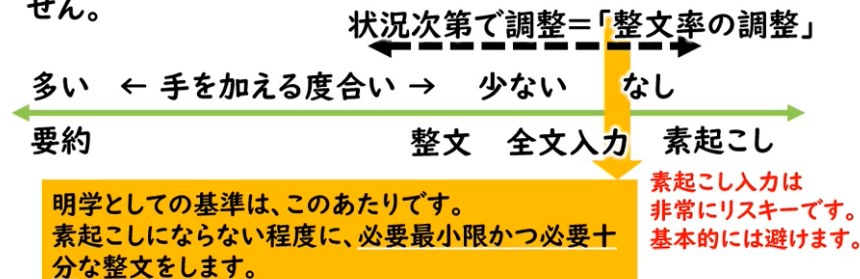
今まで言葉は変えないとか、語順は変えないとお伝えしてきました。ただ、同時に、一字一句そのまま、聞こえた通りに機械的に打つというのちも違います。それであれば、ノートテイクをするのではなく、音声認識システムを使えばいいわけです。ノートテイクが入ってサポートをする最大のメリットは、人の頭による様々な調整ができるからです。機械的に素起こしをするのではなく、この「頭」を使って打っていきましょう。

では、「言葉は変えないけど全部は打たない」とはどういう意味かというと、ここにオレンジ色の矢印がありますが、このくらいに調整して打ちましょうという意味です。

手書き ノートテイクは、要約をする

素起こしはしない！

- 言葉/語順/構造を変えないことが基本ですが、聞こえたまま何も考えずにそのまま打つという意味ではありません。



- ノートテイクが頭を働かせ「どの程度手を加えれば良いのか」判断し、「整えながら打つ」ことが必要です。
 - 聞き溜めや要約の技術が、ここで生きてきます。
- 実際の支援では状況に合わせて「整文率」を調整します。

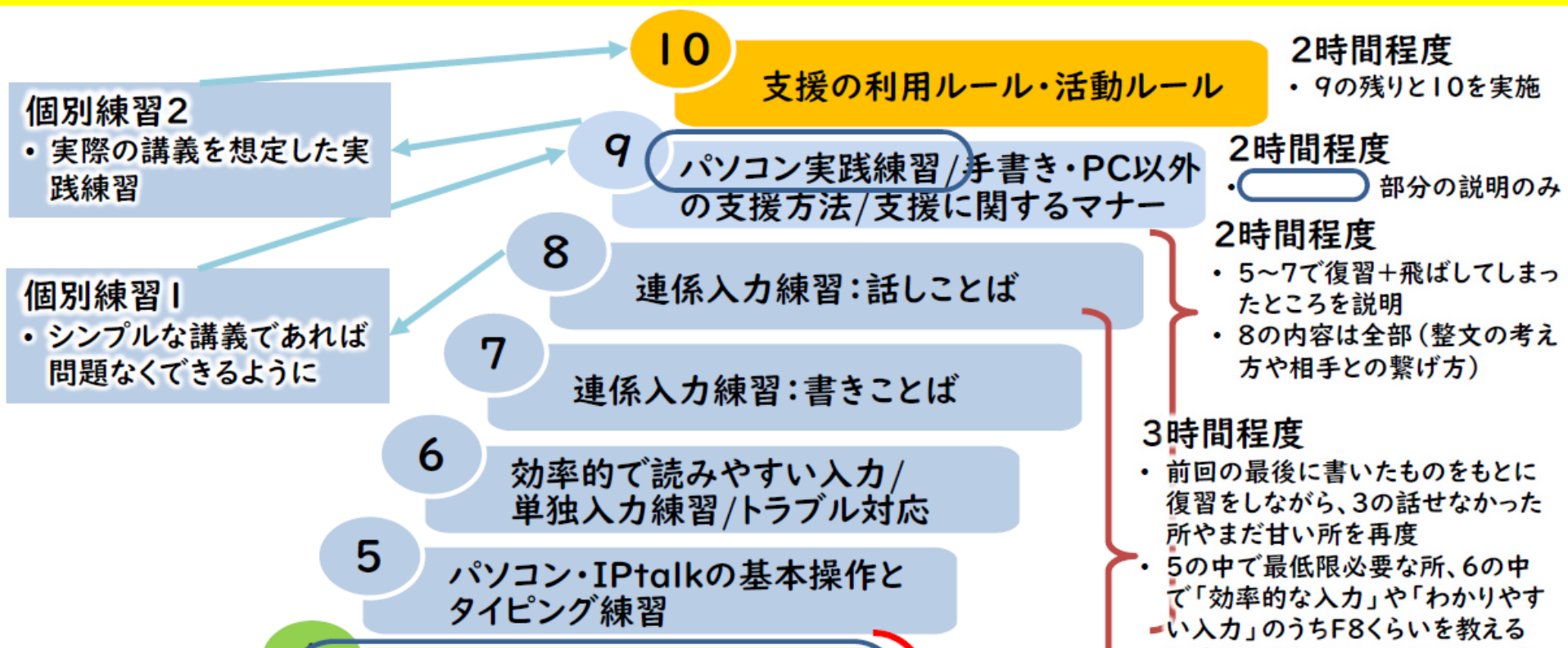
5 / 14

00:20:26 / 01:00:44



×1.0

養成プロセスの整理



- コーディネーターとテクニカルスタッフで全体像とビジョンの共有
- ある意味で例外を作らずに淡々と… 心理的負担軽減
- 学生にもゴールと求められるコミット量を明確に提示できる
… 「なんとなく続けている」「講座が終わったら活動できると思ったのに」などが減少 = 学生と大学双方の時間を有効に活用

Googleフォームとスプレッドシートを使った情報共有

【2021年度】ノートテイクー養成記録

練習終了後、各学生について記録の入力をお願いいたします。

日付

年月日

時限*

1限

2限

3限

4限

5限

その他...

学生氏名*

記述式テキスト (短文)

日付	時限	学生氏名	担当者	パートナー	使用ソフト	練習ネタ (スピード) (例: パリアフリー (1.0))	所感 (出来ているところ、課題等)	次回の目標・プラン	その他
2021/09/16	13:				IPtalk	献血 (0.8) 最後まで	<ul style="list-style-type: none"> 感動的にコンスタントな連係入力。タイピング速いということはストレスなく日本語を書けるということだなと感じました。「私がそこを歩いて」「私がなぜか転んで」「頭から血をドクドク流していたら」「わ、なんか変な人が...」というリズムで難しい場面もサクサク連係。本人は「大変でした」と言っていました。 「聞き方を随分変えられてきました」とと本人。 今日は「」も意識的につけられました。 「旅行に行くことができました」を「旅行にいけました」とする軽め整文もしている。 相手に同じリズムでの入力を期待してポンと出して去っていく習慣が残っていますが、パートナーとしてあえてそこを拾わずその先を打ったら、「あ...」と一瞬止まって、抜けた部分を打っていました。 Shift押しながらの「SL」入力に一瞬詰まっていたので (小指を離したらSLになってしまった。通じないかもと考えて打ち直したと) F10がShiftが英語入力使い分け練習。Fキーは手がホームポジションから離れるので苦手だと。 今日途中で1回、回線が不安定になったと。「そういう場合どうしますか? 聞こえたところだけ打ちますか?」と質問。(音声途切れ)とか(ハウリング音)とか出しているかな...と伝。熱心にメモをとり受講。 	新しい教材	
2021/09/16	14:				T-TAC	献血 (0.7) アメリカ伝。	<ul style="list-style-type: none"> 先生の話し方 (脱線、言いかけて方向転換) を把握して、本筋を落とさないようにした。特に2回目の入力では、書きことばに近く圧縮し、文末処理もすることで、かなり進んで入力できるようになった。 空行を入れて読みやすくすることができた。(Enterを押しすぎで空行を入れすぎのところもあった) カギカッコは、必要性は分かるが、なかなか入れることができなかった。 なかなか途切れない話し方、言いさして次の話に行くという話し方への対応に 	アメリカ先住民を最初から	

- 固有のURLを通して全員が即座に最新情報にアクセスできる
- できているところ、できていないところなどを共有 → 効率的に進める&Coが状況を把握しやすく

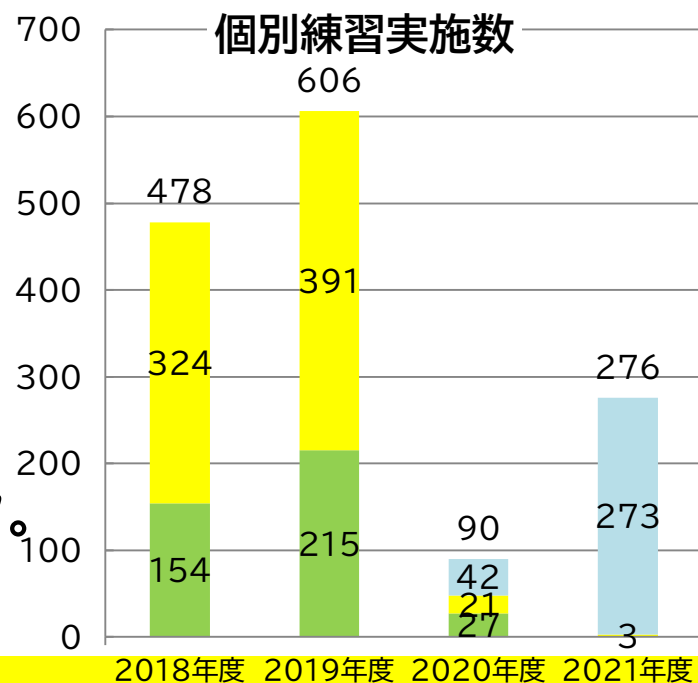
スキルアップのための動画：YouTubeチャンネル

<input type="checkbox"/>		事前準備 2 説明を追加
<input type="checkbox"/>		事前準備 1 説明を追加
<input type="checkbox"/>		Zoomの効率的な使い方 説明を追加
<input type="checkbox"/>		Zoomの効率的な使い方 説明を追加
<input type="checkbox"/>		効率的な画面配置 説明を追加

- テクニカルスタッフ等が持つスキルを整理して動画化
- 本来は「見て盗むこと」も大事。でもコロナ禍ではそれも難しいので代替的に
- “職人ワザ”をシェアしやすくし、ノートテイクー集団全体の体系的スキルアップも図る
 - 単語登録
 - 辞書の作り方
 - メモ帳の活用の仕方
 - シラバスをどう活用して準備するか
 - Zoom等をどのように配置するか

養成プロセスの改善の結果

- 2019~20年度の2年間では、
 - 126名の学生が学サポにコンタクトし、85名の学生が一度でも講座を受講し(67%)、最終的に26名がデビュー(21%)
- 2021年度はこれまでの半年で、
 - 82名の学生が学サポにコンタクトし、67名の学生が一度でも講座を受講でき(81%)、最終的に21名の学生がデビュー(25%)
- 個別練習の量と質の大幅な改善
 - 心理的な負担感の大幅な軽減
 - × 追われている
 - ○ コントロールしている
- 現場でのフォローも可能に
 - 少し心配な学生はテクニカルスタッフと組ませてデビュー。その場でフィードバック。



ここ数年間の取り組みの結果

- 聴覚障がい学生の在籍数が増えている中で、支援者を確保することが何とか可能に
- 以前よりも負担感が少ない状態でコーディネートできている
- ノートテイクカー全体としての質は飛躍的にアップしているかも
- コーディネーターが聴覚以外の学生の支援も含めた本来業務に専心できるように
 - 現場に入るとしても「事前的に」「意図を持って」入っている ×追われて
 - 直接的支援に加えて「マネジメント」「組織作り」「啓発」等により注力

0.0	2017 春	2017 秋	2018 春	2018 秋	2019 春	2019 秋	2020 春	2020 秋	2021 春
ノートテイク合計	1,192.	1,504.	3,002.	2,296.	3,010.	2,803.	491.0	894.0	1,667.
事務スタッフ		136.0	248.5	135.0	51.0	34.5	26.5	38.0	0.0
コーディネーター		121.5	250.5	94.5	214.5	87.0	62.5	63.0	117.5
テクニカルスタッフ			210.0	208.5	459.0	315.0	349.5	523.5	712.0
地域(学外者)	460.5	364.5	922.5	774.0	1,071.	862.0	0.0	0.0	187.5
学生	732.0	882.5	1,370.	1,084.	1,214.	1,505.	52.5	269.5	650.5
手話通訳合計	87.0	107.0	145.5	160.0	138.0	149.5	0.0	16.0	0.0

まとめとして

- 障がい等のある学生に対する支援は義務になる。
 - とはいえ、昔からやっていることは変わらないはず…。全ての学生が十分に学べるように環境を整えるのは大学の責務であるし、多くの大学では昔からそれをしてきたはず。
- それを前提として、それを果たすためにできることを探し、大学も「変化」することで、何とか対応する方法を模索していくことが大切だと思います。